

ブックリスト

今回お届けした冊子の一覧です。その他の成果物・発行物については各事業サイトよりご覧いただけます。

『東京アートポイント計画』
『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本(増補版)』(東京アートポイント計画)
『ART BRIDGE 05 Spring 2017』(Art Bridge Institute)
『TRANSIT REPUBLIC 01—ART BRIDGE-special edition zine』(Art Bridge Institute)
『東京スーブとブランケット紀行「お迎えの時」』(東京スーブとブランケット紀行)
『TERATOTERA DOCUMENT 2016』(TERATOTERA)
『としまアートステーションXのつくりかた』(としまアートステーション構想)
『JOURNAL 東京迂回路研究3』(東京迂回路研究)
『12Class 2017春号』(三原色(ミハライロ))

Tokyo Art Research Lab

『Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」基礎プログラム年リアルレポート2016』(思考と技術と対話の学校)
『基礎プログラム1[思考編]「思考を深める／想像を広げる」講義録 2016』(思考と技術と対話の学校)
『基礎プログラム1[思考編]「仕事を知る」講義録 2016』(思考と技術と対話の学校)
『アートプロジェクトの現場で使える27の技術』(思考と技術と対話の学校)
『プレイ・パーク・パーティーを考える日—Tokyo Art Research Lab「思考と技術と対話の学校」基礎プログラム3 [対話編]実践プログラムドキュメント』(思考と技術と対話の学校)
『東南アジアリサーチ紀行—東南アジア9カ国・83カ所のアートスペースを巡る』(研究・開発:Alternative Asia Platform)
『Traveling Research Laboratory 2016』(研究・開発:旅するリサーチラボラトリーⅢーフィールドワークと表現ー)

<div><div></div>Art Support Tohoku-Tokyo</div> <div><div></div>(東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)</div>
『松島湾のハゼ図鑑』(つながる湾プロジェクト)
『ノック!ーじぶんの地域ともう一度出会う10の扉』(つながる湾プロジェクト)
『2016 学校連携共同ワークショップ 報告書』(学校連携共同ワークショップ)
『潮目のまから—文化政策の可能性と、いわきの多様性』(マナビバ。-mana viva-)
『森のはこ舟アートプロジェクト2016 活動報告書』(森のはこ舟アートプロジェクト)

TURN

『日比野克彦とブラジルでTURNした39日間』(TURN in BRAZIL)
『TURN NOTE—「TURN」を考えたときの言葉2016』(TURN)

※「TURN」は日比野克彦氏による監修のもと、多様な人々との出会い方、つながり方に創造性を携え働きかけていくアートプロジェクト。http://turn-project.com

「裏庭」をつくる — インターネット空間から見た、アートプロジェクトとアーカイブ 須之内元洋／Motohiro Sunouchi

<p>札幌市立大学デザイン学部講師。ソニー株式会社、サイボウズ・ラボ株式会社勤務を経て現職。メディア環境学、情報科学、音の環境学分野で研究を行うほか、デジタルアーカイブをはじめとした各種デジタルメディアの設計・開発、メディア・アートの実践を行う。</p>
<p>Tokyo Art Research Lab(TARL)の研究・開発では、アートプロジェクトの分野における課題の検証や新たな手法づくりを、さまざまな専門家の方々と展開しています。メディアデザインを専門とする須之内元洋さんとは、2013年度よりデジタルアーカイブのプロジェクトに取り組んできました。アートプロジェクトにおけるデジタルアーカイブの設計や開発に関わるなかで気づかれたこと、また須之内さんが考えるこれからのインターネット社会やデジタル環境のあり方について伺いました。</p>
<p>聞き手 佐藤李青+中田一会 [アーツカウンシル東京]</p>

アートプロジェクトとデジタルアーカイブ

— **須之内さんにとってのデジタルアーカイブとは何でしょうか？**

人間は太古の時代から、日々の営みや考えを、言葉や絵、ものや身体で表現し、それを別の人が受け取ってまた新しいものをつくる、ということを繰り返してきました。そこに加わったインターネット空間、デジタル空間は、我々の生活圏に登場してからまだ、せいぜい20年とちょっとです。表現されたモノやコトを、新たに加わったデジタルメディアによってどのように資産として引き継いでいくのがデジタルアーカイブの分野ですが、まだ未知数などがあります。僕自身、初めから専門家になろうと思っていたわけではなく、2000年代後半から「資料や記録がたくさんあるけれど、うまく活用できないか」といった話をいただくようになり、その都度考えながら手探りで仕組みをつくってきました。デジタルアーカイブと一口にいても、国や地方自治体、企業が運用するものから個人の日記まで、アーカイブと呼べるものはさまざま。インターネットが日常になった現在、「アーカイブとは何か」を探りながらも、やれることはまだまだたくさんあると感じています。

— **アートプロジェクトのデジタルアーカイブに取り組まれたのは、TARLがきっかけですね。その前は陶磁器デザイナーの森正洋さんのアーカイブや建築雑誌『10+1(テンプラスワン)』のデジタルアーカイブにつくられています。そういったお仕事と、アートプロジェクトのアーカイブとはどのようなところに違いがありましたか？**

それまでの仕事では、依頼された時点で既に情報や資料がありました。その素材を編集するというか、見せる仕組みづくりをするのが僕の仕事です。ただアートプロジェクトは、まずは情報や資料を集める、記録をしていくところからはじめなくてはなりません。むしろ記録のプロセスが大きなウエイトを占めているのが大きな特徴です。プロジェクトによってそれぞれの理想や活動の中身も異なるので、何をどう記録するかも重要な視点でした。ただ情報をストックするだけなら、単にハードディスクやDropboxに貯めていけばいいです



を改めて感じ、勉強させてもらいました。

— **須之内さんにとってのデジタルで記録することや残すことは、日常的な営みのなかにあるものなんですね。ただ、それを「みなさんもやってみよう」といっても、急に習慣化することはなかなか難しい。そういう場合、システムの設計側としてはどのような対策をとられたのですか？**

その人が必要な機能だけに絞って、ゼロから設計することもできますが、それは実際に住むかどうか分からない注文住宅を一戸ずつ建てるような話で、とても現実的ではないんです。ですので、基本的な機能が詰まったシステムを、カスタマイズして使ってもらいました¹。その上で、例えばインタラクション(システムとの対話・やり取り)やインターフェイスなどを分かりやすくしたり、つまづきやすいところを小まめに直していくといったことなどをしました。しかし、抜本的に考え方を変える必要性を感じて開発したのがスマートフォン用アプリでした²。昨今は、それぞれが使い慣れた記録のためのアプリやソーシャルメディアが既にたくさんあります。であれば、ネットに分散して記録されている資料を、プロジェクトごとに自動集約し、手元のアプリで目次化できればいいんじゃないかというアイデアです。

1 2013～2014年度はオープンソースソフトウェアをカスタマイズし、デジタルアーカイブシステムをアートプロジェクト団体に提供。



2 検証実験中のアプリ。招待されたメンバーは「フック」という仕組みで、集まったデータを閲覧することができる。例えばFlickrの特定のアカウントや、FacebookページのURL、またはハッシュタグなどをフックとして設定し、そのフックによって集まった情報がプロジェクトの記録として蓄積される。

石のような、裏庭のようなインターネット

— **アートプロジェクトを運営する方々には、常にアーカイブの重要性や必然性を伝えられていたと思いますが、いま改めてどのように感じられますか？**

自分が聞いた話や体験したこと、ひらめいたことを蓄積し、それを表現したり伝えたりすることで世の中はよくなっていく。だから、アーカイブは絶対に必要な機能なんです。それから「裏庭」的な部分を構築する役割もアーカイブにはあると思います。強い信頼関係のもとで、自分たちの意見をうまく束ねて素早く行動できるような、コミュニティの規模がありますよね。それを「裏庭」と呼んだとき、そこでやったことを、うまく外につないでいく役割もアーカイブにはあるでしょう。アートプロジェクトも一種の「裏庭」かもしれません。

— **「裏庭」ってわくわくする響きですね。完全にオープンな場ではなくて、楽しみ方を共有する人が集ってくる場というイメージでしょうか。アーカイブには、ストックしたり固定化したりといったイメージがありますが、須之内さんのお話を伺うと「共有や表現」が重要な気がしました。**

図書館も「アーカイブ」と言いますが、本を収蔵するだけではなく、貸し出しもする「活用」の概念も入っています。活用するところまでを含めてアーカイブになるのではないのでしょうか。先ほどのアプリは、プロジェクトのメンバーがさまざまなソーシャルメディア上に記録したデジタル資料を一覧で可視化できます。それはアーカイブづくりに使う装置というより、アーカイブをするための身体そのものをつくっていくような装置でもある気がしています。そのアプリは一つの例ですが、もう少し自動的に裏庭をつくりたり、ばらばらにあるものを統合したりする技術が必要になっていくでしょう。以前、アーティストのエキソニモさんが、石からインターネットを考える「インターネットの石」という言葉を使っていて、すごくおもしろいなと思ったことがあります³。

インターネットは、かつてはこちらがアクセスしていく、見に行くものでした。それががらりと変わったのが、FacebookやTwitterなどが登場した2006、2007年辺り。インターネットがリアルタイムなコミュニケーションメディアになり、情報が流れていくものになりました。でも、アーカイブの歴史を考えると、ロゼッタ・ストーンやラスコーの壁画など最古のメディアは石。大事なことを記録してポケットに入れ、肌身離さず持つておける石ころのようなインターネットがあってもいいんじゃないか、と思っています。

— **いまはそういった石のような存在はあるのでしょうか？**

ほぼないと思います。データのバックアップはとっ

ていても、消えてしまう不安は常にあります。クラウドに入れておいても、消そうと思えばいつでも消えてしまう儚さは変わりません。ただ、例えばマイケル・ジャクソンが亡くなったとき、その直後YouTubeにマイケルの映像が急増しました。ファンたちが、それぞれが持っていた好きな映像を一齐にアップしたわけです。「石」のような形を求めるのだけではなく、違った視点で考えると、こうした残り方もあると思います。それから、いかに残すかも大きなテーマですが、いかに消すかもすごく大事です。最近Facebookにも「秘密のスレッド」機能や、メッセージを自動的に消滅させるタイマー機能が実装されましたが、履歴を消したいというニーズもあります。携帯電話やソーシャルメディアなどの個人情報も、自分の臓器として考えればいいという人もいます。臓器提供の意志登録のように、「消してください」という人もいれば「誰かの役に立ててください」という人もいるのだらうと思います。

チャンネルの多様性

— **お話を伺っていて、デジタルメディアやインターネットについて考えるとき、須之内さんはまず人の「行動や行為」を見ている気がしました。**

人はもちろん見えています。大学生の頃は建築学科にいたのですが、建物の設計も人が行き来するシステムとして考えていました。かたちは全然うまくつくれないんですが、仕組みを考えたりつくりするのは夢中になれるんです。プログラムを書いているときは、立体物を構築している手触り感もあります。いまは、裏庭みたいなものをつくりたいですね。それはユーザーが切実な関心事を介して表現すること、もっと多様なかたちでユーザーが見たり聞いたりしたことでつながっていく世界です。まずは自分の好きなものから実践しているところです。実は僕は植物のランオタクなんです。ソーシャルメディアなどのデジタルメディアにテキストを入力する際にランの種名(3万種近く存在しラテン語で表現される)を容易に補充・検索・入力ができる仕組みをつくりました。今年の11月、エクアドルで3年に一度の「世界蘭会議」があるので、そこで発表させていただきます。

現在、すでに多様なソーシャルメディアが存在しますが、そこで表現ができる人、表現できる内容は、まだまだ限定的だと考えています。日常的に感じたことを表現したり、記録したりできる別の方法も探っていきたいです。

— **須之内さんが見ているインターネットの世界のなかだと、現実空間に縛られない表現方法が実現できそうですね。世界の構造自体をつくってしまうような裏庭的な空間づくりを目指されているのですね。**

小さな裏庭は、もう既にいっぱいあるわけですよ。例えば、アニメやアイドル、2次創作はもちろん、植物や山登り、料理などの分野でも、インターナショナルなFacebook非公開グループが無数にあります。僕が入っている、原種ランの非公開グループだけで、メンバーが1万8000人くらいいるんです。もはや裏庭という規模ではありませんが、

そこに写真やコメントを書き込むとさまざまなリアクションが返ってきます。趣味嗜好のマーケティングのようなことにもなる。一人ひとりが持っている多彩な趣味性を、もっと多様に表現できるメディアができてほしいなと思っています。同じ場所にいても、隣の人同士で見ているものや聞いているものって全然違うこともありますよね。世界には、似た価値観の人もたくさんいますし、自分の考えが伝わる場所もある。その逆の人とも出会える。そういうチャンネルをいくつも持てるいいと思います。

(2017年1月27日、3331 Arts Chiyodaにて)

<div><div></div>TARL研究・開発</div> <div><div></div>デジタルアーカイブ・プロジェクトの歩み</div>
<p>▶2013年度</p> <p>長く続いたアートプロジェクトの成果を検証する「アートプロジェクトのインパクトリサーチ」の一環として「明後日新聞社文化事業部」の11年分の記録写真(約3万5000点)と「明後日新聞」のデータ(約160号分)を対象としたアーカイブシステムとビューアを開発。オープンソースのデジタル管理システム「ResourceSpace」とコンテンツ管理システム「WordPress」を活用。参考:『デジタルアーカイヴのススメ』(須之内元洋著、東京文化発信プロジェクト室、2014)</p>
<p>▶2014年度</p> <p>前年度に開発したシステムを「東京アートポイント計画」の現場で試験導入。15団体が導入し、11団体が運用。システム導入の困難さと「記録と記録活用の速度がプロジェクトの活動速度を追い越す」ほど、積極的に活用するプロジェクトが現れる。参考:『デジタルアーカイブの営みをつくる—アートプロジェクトの現場から』(須之内元洋・熊谷薫著、東京文化発信プロジェクト室、2015)</p>
<p>▶2015年度</p> <p>システムから「アプリ」の開発へ方針を転換。インターネット上に偏在するデータを一元化する「フック」という発想を導入したプロトタイプアプリを制作。</p> <p>※これまでの成果はTokyo Art Research Labのウェブサイト(http://tarl.jp)でご覧いただけます。</p>

<div><div></div>Words Binder 2016 / Box + Letter</div>
<p>発行日 2017年3月23日</p> <p>編集 川村庸子、佐藤恵美</p> <p>アートディレクション&デザイン 川村格夫</p> <p>発行 アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)</p>
<p>〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階 Tel: 03-6256-8435 Fax: 03-6256-8829 Email: info-ap@artsCouncil-tokyo.jp URL: http://www.artsCouncil-tokyo.jp</p>
<p>© 2017 Arts Council Tokyo</p>

*本誌はTokyo Art Research Lab 研究・開発プログラムにて制作しました。

日頃お世話になっているみなさまへ

早春の候、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

今年も「ことば」がたくさん生まれました。

「東京アートポイント計画」「Tokyo Art Research Lab」「Art Support Tohoku-Tokyo」「TURN」の4事業において紡がれたことばを、2016年度の成果物としてお届けいたします。

その数、計22冊。多いと思われるかもしれませんが、まだまだ足りません。

文化事業がより社会のなかで機能していくために、現場の声を運び、共通認識をつくる必要があると考えているからです。

現在、日本社会は大きな転換期にあるといえるでしょう。東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に伴い文化事業も増大しています。そのとき、アートプロジェクトを促進するだけでなく、文化的な感性を持つ「ことば」が社会に浸透することで、既存の境界線が揺らぎ、混ざり、新たな関係性が育まれていくのではないかと考えています。

昨年度は、福祉や多文化などのテーマと積極的に関わりはじめました。今後は、「TURN」のように、アートワールドと社会包摂的な動きがより混ざり合い、ひとつの生態系を形成していくはずです。そのとき、本来アートが持つタフさをしなやかに発揮することが求められます。アートピースからアートプロジェクトへ。そして、さらに人々の「生活」を舞台にアート「で」何ができるか、いよいよその質が試されていくでしょう。

次の段階は、はじまりと終わりのある「プロジェクト」という単位から、有機的な「スケープ」へ。そこには、多種多様な営みが同時多発的に存在している、見たことのない風景が広がっているのではないのでしょうか。そうした環境をみなさんと一緒につくっていきたいと思っています。これからもどうぞよろしく願いいたします。

アートカウンシル東京 事業推進室 事業調整課長



あ び

プロジェクトからスケープへ

東京アートポイント計画

事業単体から、仕組みそのものの発信へ

今年度は、13事業を共催し、そのうち「としまアートステーション構想」「Art Bridge Institute」「三原色(ミハライロ)」「東京迂回路研究」の4事業が最終年を迎えました。

としまアートステーション構想では、6年間の集大成として、『としまアートステーションXのつくりかた』を制作。アートを生み出す拠点をつくるために、区民の参加を促すだけでなく、区民自らが主体となって場をつくる方法論をかたちにした一冊です。

tarl TOKYO ART RESEARCH LAB

事務局をコアにした、ゆるやかなネットワークへ

アートプロジェクトの担い手を育てる「思考と技術と対話の学校」では、思考編、技術編、対話編と毎年積み上げてきた3つの基礎プログラムが一巡し、全プログラムを修了した受講生を初めて輩出しました。この3年間で受講生の数は延べ113名、講師・ゲストの数は120名。「アートプロジェクト」を共通言語とする人々のゆるやかなネットワークが育まれ、今後の文化事業を支える大きな力になっていくはず。発行物は、講義録やアートプロジェクトに必要な技術を抽出したド

ART SUPPORT TOHOKU-TOKYO

被災地支援から、未来に向けたアクションへ

震災から6年目を迎え、外部支援に関わってきた人が減ってきたなど、状況が次の局面に移行してきたと感じています。つまり、災害によって起こったことに対応していく「被災地支援」ではなく、もう少し先の未来に対して何ができるかを、具体的ににつくっていく時期になりました。

そのため、これまで以上に東北と東京、互いの持っているものを交換する意識が必要になってきています。東北の「支援」だけでなく、

東京の地域社会を担うNPOとアートプロジェクトを実施し、NPOの活動と組織の両面の成長を支援する取り組み。目指すのは、日常や社会に芸術文化が根つき、長期的な東京の魅力創造につながる。そのために、アートプロジェクトの人材育成や活動基盤の整備を重視している。

アートポイントを卒業していく団体がいる一方で、共催団体の「公募」も実施しています。〆切は、4月25日。アートポイントでこれまでに共催してきたNPOは40団体を超えました。東京に活動的なアートNPOが増えていくことで、“文化のよろず屋”的なネットワークが築けていければ嬉しいです。次年度、また新たなチームに出会えることを楽しみにしています。また、『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』の増補版を3年ぶりに制作しました。

アートプロジェクトを実践する全ての人々に開かれ、共に作りあげる学びのプログラム。人材育成、現場の課題に応じたスキルの研究・開発、資料の提供やアーカイブなどを通じ、社会におけるアートプロジェクトの可能性を広げることを目指している。

キュメントなど、各プログラムの特徴を活かしたものが完成しました。新たなシステム/スキルを追求する「研究・開発」では、これまで重点的に取り組んできた事務局のマネジメントスキルについての議論は一区切りついたように思います。現場の幸せな働き方を考えたり、海外に発信したりと、これまでの知見をいま取り組むべきトピックに応用する。事務局運営だけでなく、その周縁の領域をも視野に入れながら、新たなフィールドに出かけていくイメージです。

東京都による芸術文化を活用した東日本大震災の被災地支援事業。東京アートポイント計画の手法を用いて、被災地域のコミュニティに対して、現地のNPOやコーディネーターと連携しながら、アートプログラムを実施し、地域の多様な文化環境の復興を支援している。

東北の経験をどのように東京に活かしていくのかも問われるのではないのでしょうか。今年度はこれまでをふりかえるために、改めてパートナー7名にインタビューを行い、『6年目の風景をさく 東北に生きる人々と重ねた月日』を刊行しました。アートプロジェクトの話だけではなく、被災前後の暮らしの変化についても伺いました。現場の三県からもそれぞれ特色あるドキュメントが届いています。特に宮城県「つながる湾プロジェク

わたしたちプログラムオフィサーが更新した経験を言語化し、新しいメンバーの視点を追加しています。アートポイントも9年目。これまでは各事業の発信が中心でしたが、この仕組みそのものを届けることに挑戦します[大内/芦部]。

[Facebookページもスタートしました。](#)

<https://www.facebook.com/tokyoartpointproject>

また、“アートプロジェクトを担う全ての人のための「使える」ラボ”をコンセプトに、WEBサイトをリニューアルしました！これからも現場と連携しながら実践的な人材育成や研究・開発に取り組んでいきたいと思っています[坂本/佐藤]。

[WEBサイトをリニューアルしました。](#)

<http://tarl.jp>

ト」では、事業での知見をツール化する段階に入っています。ここから本番です。これまでの実践を、個人の「経験」以上、全員の「教訓」未満、実感をもって、ともに眺められる「風景」としてかたちにしていきたいと思っています[佐藤/嘉原]。

[『6年目の風景をさく』はサイトで閲覧できます。](#)

<http://asttr.jp/book>